

二彩陶器の多口瓶 — 謎多き多彩釉陶器 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 出土した二彩多口瓶

はじめに 写真の土器は、2019年4月に北区大將軍東鷹司町(平安京右京一条二坊十六町跡)で行なわれた発掘調査で出土した二彩陶器の多口瓶です。

多口瓶とは「五口壺(瓶)」「多口壺」「多嘴壺(瓶)」などとも呼ばれ、中心に1つの大きな口があり、その周りに肩部から立ち上がるようにして複数の小さい口が付いた壺のことです。特殊な形に加え、出土する遺跡に寺院跡が多いことから仏具や祭祀具と考えられています。

調査では平安時代の土御門大路南側溝やそれに伴う柵・柱穴・整

地層などを確認しました。この多口瓶は平安時代初頭に地山面を整地する際に廃棄されたものと考えられています。

多彩釉陶器とは この多口瓶を含む多彩釉陶器は、鉛を主な原料とした緑色・白色・黄色などに焼き上がる釉薬を使用し、800～850℃の比較的低い温度で焼成した施釉陶器のことです。施されている釉薬の数によって1色は「単彩」、2色なら「二彩」、3色が「三彩」と呼び方が変わります。今回出土した土器は緑釉と白釉の2種類が施されている二彩陶器です。

多彩釉陶器の生産は奈良時代に

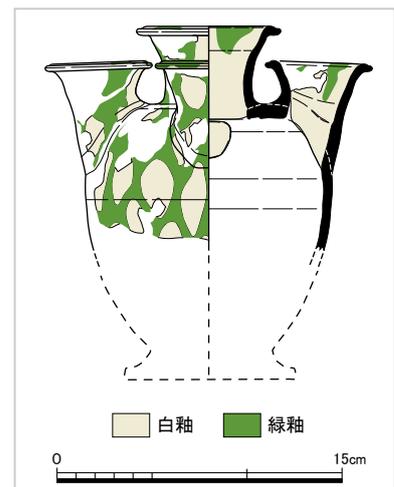


図1 実測図(1:4)

中国の唐三彩の影響を受けて始まり、平安時代初期まで続きました。ごく少量しか生産されていなかったようで、出土例は全国的にみても極めて珍しいものです。比較的

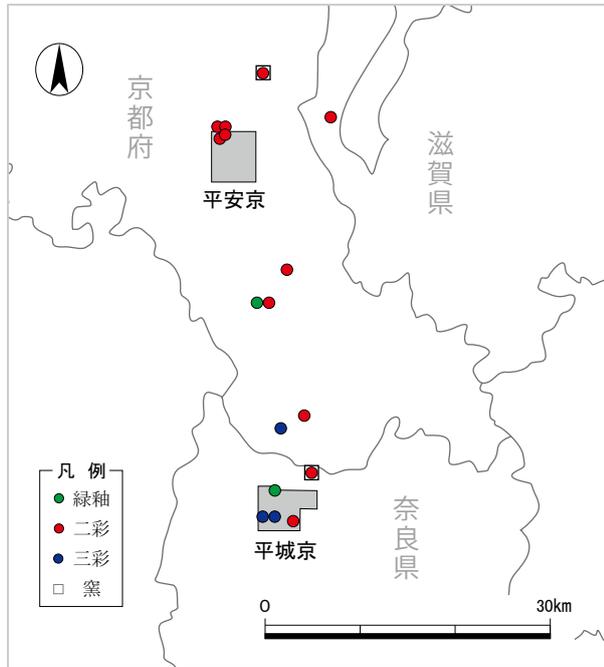


図2 多彩釉多口瓶出土分布図

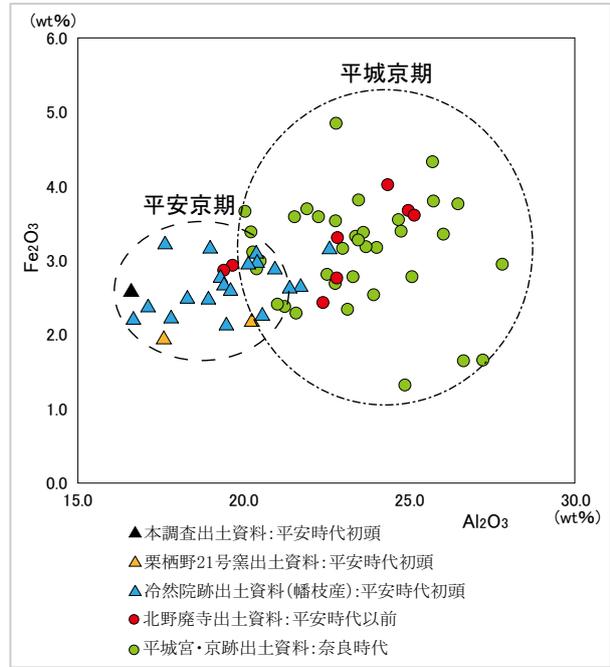


図3 蛍光X線分析の結果

出土量の多い京都市内においても小片を含めて約80点程しか確認されていません。これがどれほど少ないかという、50年近く平安京の発掘調査を行ない、遺物コンテナ約20万箱を収蔵している当研究所においても、遺物コンテナ2箱分にも満たない量です。

生産地についても不明な点が多く、現在、生産窯として確認されているのは、洛北の左京区岩倉幡枝町の丘陵地にある平安時代初期の栗栖野21号窯のみです（リーフレット京都No.43）。他に可能性が考えられるものは奈良時代の奈良市佐保山遺跡があります。

多彩釉多口瓶の出土例は国内では20点ありますが、畿内と周辺では16点（図2）、その他では二彩2点、三彩2点の4点が出土して

います。出土遺跡は、都が置かれた平城京・平安京やその周辺寺院からの出土が圧倒的に多くなっています。釉薬に注目すると、平安京内・周辺では二彩多口瓶のみですが、これに対して平城京とその周辺では、二彩だけでなく緑釉・三彩の多口瓶が確認されています。

今回出土した二彩多口瓶は極めて出土例が少ないという点に加えて、釉薬の色合いや残り具合など大変良い状態であることから貴重な出土例となりました。

生産地と口縁の形 まだまだ謎多き多彩釉陶器について生産地などを追究するため、今回出土した多口瓶に加えて、京都市内で出土した資料を中心に釉薬と胎土の蛍光X線分析を京都国立博物館に依頼しました。

その結果、今回出土した多口瓶は胎土において栗栖野21号窯出土のものに近い値になったことから、洛北地域の窯で生産された可能性が高いことが分かりました（図3）。

また口縁部の形に注目すると、複雑なものから簡素化していくことを確認し（図4）、この形の変化が分析の結果とも矛盾しないことが分かりました。

まとめ 今回、考古学的考察に加えて科学分析を行なったことで、多彩釉多口瓶における口縁部の形式変化や平城京期では緑釉・二彩・三彩など多様なものが生産され、平安京期では二彩へと集約されていくなどの製作技法変化を確認することができました。また、平安京の宅地内から出土したことで、高級貴族の持ち物であった可能性が考えられます。今回の調査では建物跡など確認できませんでしたが、今後の調査に期待しています。

（岡田麻衣子）

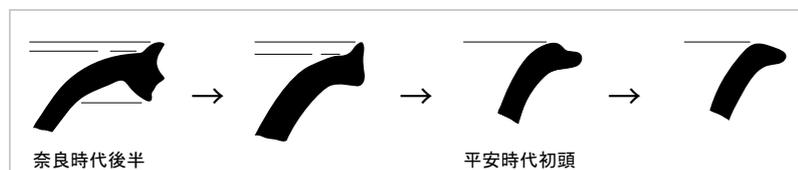


図4 口縁部の形式変化